龍馬とおゆきの
まっこと どらまちっくぜよ
吉橋通夫作
早川和子絵

創作のメロディ④
龍馬とおゆきの　まっこと　どらまちっくぜよ

1995年5月1日　第1刷発行

作　者　吉橋通夫
画　家　早川和子
発行者　水谷雄二
発　行　株式会社文溪堂
〒112 東京都文京区大塚3-16-12
☎ 営業部 (03) 5976-1515／編集部 (03) 5976-1511
振替 00140-7-167627
印　刷　三美印刷株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

©1995 Michio Yoshihashi & Kazuko Hayakawa. Printed in Japan.
ISBN4－89423－061－5　NDC913/157p 22cm
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。定価はカバーに表示してあります。

龍馬とおゆきの

まっこと どらまちっくぜよ

吉橋通夫作　早川和子絵

もくじ

第一章　龍馬がふたり　6
第二章　国見丸へ　24
第三章　姿なき襲撃者　40
第四章　甲板の対決　73

第五章　かんざし　95
第六章　尾行（びこう）　118
終章　さらば長州（ちょうしゅう）　147

表紙・さし絵＝早川和子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

龍馬（りょうま）とおゆきの　まっこと　どらまちっくぜよ

第１章　龍馬がふたり

1

坂本さまは、まきわりが、寺田屋の男衆よりもうまい。さむらいにしておくのが、おしいくらいだ。

「チェストー」

変な気合とともに、長いおのをふりおろすたびに、

カッ！

と小気味いい音をひびかせて、まきがふたつに割れる。

横でおゆきは、それをひろい集めていく。

「チェストーっていうのは、土佐弁どすか」

「いや、薩摩弁じゃ。おもしろいきに、借り

ちょる。けど薩摩のさむらいが、大刀をふりかざして、この気合もろとも打ちこんできたら、まっこと肝が冷えるぜよ」
「あら、坂本さまは、なんとか一刀流の免許皆伝でしょう」
「あんなもん役に立たん。剣術の極意は、にげるが勝ちじゃ」
寺田屋のお勝手に通じるこの裏庭は、船着き場がある表とちがい、とても静かだ。板べいのむこうは細い路地で、人もめったに通らない。だから、すきなことが話せる。
「坂本さま、いっそおさむらいをやめはったらええのに。そのかっこう、よう似おうてるわ」
「じつはわしも、早うやめたいんじゃ」
このところ伏見奉行所や新選組の取り調べがきびしく、宿改めがよくおこなわれる。幕府に敵対する浪士や長州人たちを、かたっぱしからつかまえているのだ。
坂本さまも、幕府からつけねらわれているため、寺田屋のおかみさんに言われて、つつそでの仕事着に、紺色のももひきすがたという船宿の男衆のかっこうをしている。
「さむらいをやめて、何をしはるの？」
「まず、蒸気船で世界の海へこぎだし、日本人が知らんことをたっぷり学んでくる。それ

を生かして、人びとの暮らしを、もっともっと豊かにしたいんじゃ」
「おもしろそう……。うちもいっしょに行きたいくらい」
「おまんは、船をこぐのがうまいきに、女水夫として連れていくか。はっはっは」
そのとき、お勝手の戸があいて、おかみさんが走り出てきた。手にした封書を坂本さまにさしだす。
「中岡慎太郎さまからどす」
「ほう、めずらしい」
中岡という人は、もと土佐藩のおさむらいで、この寺田屋にも来たことがある。
書状をよみおえた坂本さまは、肩をすくめた。
「中岡は、いま長州におるそうじゃ」
おかみさんが目を丸くする。
「ほんまどすか」
長州はいま戦場である。まだ戦いは始まっていないが、幕府の命令で各藩からあつめられた十五万の兵が、陸と海から長州をとりかこんでいる。この夏、京都へ攻めのぼり敗走した長州藩の息の根を止めるために、幕府が大軍を送ったのだ。

「なんでまた中岡はんは、そんなあぶない所へ行ったはるのどす？」
「幕府をたおすためにひとゆくさするつもりらしい。わしにも来いと言うてきちょる」
「まあ、長州へ！」
おゆきは、思わず大声をあげてしまった。
すると、二階の障子がほそめに開いて、お客が顔をのぞかせた。だが、ちらっとこちらを見おろしただけで、すぐに引っこんだ。
おかみさんが小声で言う。
「あのお客さんは、商人のかっこうをしたはりますけど、お武家はんどすえ」
おかみさんは、たくさんのお客さんと接しているから、すぐに見ぬいてしまう。
「幕府の犬か？」
「わかりまへん。同じ部屋に五人いてはりますし、あとから浪士ふうの人も、たずねて来はりました」
そのとき、表から男衆の大声がひびいた。
「お奉行所の宿改めでっせ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

六尺棒をもった捕り方たちをしたがえた同心が、どんぐり目で店の中を見まわす。

「客は、これだけか」

土間の床几には、七、八人のお客が火鉢をかこんですわっている。大坂へ下る三十石船を待っているのだ。その中に、奉行所でさがしている長州人や、なかまの浪士たちは見あたらないらしい。

同心が、二階をあごでしゃくった。

「上は？」

おかみさんが、少し太めの首をかしげる。

「商人衆が、いてはりますけど……」

「あがるぞ」

「へえ」とうなずいて、おかみさんが先に立った。板の間にあがり、階段の下から声をかける。

「お二階のお客さまがた、お奉行所の宿改めにございます」
同心やその部下たちが、階段に足をかけたとき、とつぜん上から、かん高い土佐弁がふってきた。
「ちくと静かにしておうせ。やかましゅうてゆっくり寝てもおられん」
階段の上に、背の高い浪士ふうの男が、ふところ手をしてぬうっと立っている。
同心が、ぎくっとして身構える。
「藩名と姓名をうけたまわろう」
男はニヤッとわらった。
「土州浪人、坂本龍馬」
おゆきは、どきっとした。
――べつの坂本さまや！
同心が、部下をつきとばすようにして、はだしのまま土間にとびおりる。
「だれか奉行所へ走って応援をよんでこい。多ければ多いほどいいぞ」
「へい」
とさけんで、部下のひとりがすっとんでいく。

坂本龍馬と名乗った男が、階段をゆっくりおりてきた。
たしかに、髪がぼさぼさで背が高く、色が黒いところは坂本さまそっくりだ。だが、目がちがう。抜き身の刀のように、するどくとがっている。
男は、階段をおりきったところで、床にペッとつばをはき、ふところ手をぬいた。その手には、黒いピストルが光っていた。
おゆきは、びくっとして身をちぢめる。
――坂本さまが持ってはるのと、いっしょや！
「死にたいやつは、前へ出ろ」
同心が、二、三歩うしろへさがり、お客たちも、店のはしのほうへかたまる。男は、ピストルをかまえたまま土間におりて、ぞうりをはく。
「じゃまだ、道をあけろ」
同心と部下たちは、ずるずるとあとずさりして、そのまま店の外へとびだした。つづいて男も表通りへ出る。
そのときおゆきの耳もとで、とぼけた声がした。
「まっこと、おもしろい見ものぜよ」

ふりむくと、いつのまに来たのか、坂本さまがニヤニヤわらっている。
おゆきは小声で聞いた。
「あの人、だれどす？」
坂本さまが首をかしげる。
「わしのファンかのう」
「ふぁん……て？」
「わしに、あこがれとる者のことじゃ」
おゆきは、ぷっとふきだした。
坂本さまのファンらしい男は、さんざんピストルで同心たちをおどしたあと、急に身をひるがえしてにげはじめた。
「待てえ！」
同心とその部下が、へっぴりごしで追いかけていく。
すると坂本さまが、
「わしも、ちくと、わしを追いかけてみちゃろ」
と、木くずをももひきにくっつけたまま、とびだしていった。

おゆきは表通りへ走り出て、商人すがたの男たちがいる二階を見あげた。障子が細目にあいており、外をのぞいている者がいた。だが、おゆきと目があったとたん、障子をぴしゃっとしめた。

――いったい何者やろ？

やがて、さわぎを見物していた人たちが散りはじめ、おかみさんが三十石船の船頭に声をかけた。

「奉行所から捕り手が来たら、ややこしゅうなりますよって、早めに船を出しまひょか」

「おお、それがええ」

船頭衆がてんでにうなずいたので、とりあえずおゆきは、川端の船着き場に立って大声をあげはじめる。

「寺田屋の三十石船が、出ますえ」

女中たちが、店の中からお客をつぎつぎと船着き場まで送って出る。みんな、わらじを荷物にくくりつけ、「寺田屋」の焼き印がおしてあるげたのまま、浜へおりる。ぬぎすてられたげたが、石段に少しずつふえていく。

おゆきは、二階を気にしながら道行く人たちによびかける。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com